20 粟 田焼と清水焼

きょうとのやきもの あわたやきときよみずやき

知 る

京都で産する陶

と伝えられています。 |六六八~七四九) が東山 京都で製作される陶器は、 この清閑寺に窯を築いたのにはじまるほは、天平年間(七二九~四九)に行基 行 基 き

衛門が開いた粟田口焼が粟田焼の起原と、つてきただち、江戸時代初期より本格的な作陶がはじまり、 Щ 源となりました。 帯の音羽・清閑寺 ・清水などに築かれた窯は清が、栗田焼の起源といわれ、そ 三文字屋九右 その 水 後、 焼 の起 東

色絵陶 [器の大成と御室焼

六五六)の指導の 五六)の指導のもと、御室仁和口の窯にはじまる京都の焼物 開いた野々村仁清(生没和寺門前で窯(御室焼)を は、 年未詳)によって大きく 金森宗和の 五. 八四

\ ___

田

物 仁清は、 見 陶 て茶器製 \mathcal{O} 基礎を、 法を学び \mathcal{O} 京都 作 粟 瀬戸には まの 田 伝 \mathcal{O} П た。 焼物 統 で 技 的 赴 焼

> かな色絵の陶器を作りはじめ、 である色絵陶 その後、 多かった初期の清水・ 呼ばれるようになります。 寛永期(一六二四~四四)に入ると、 \mathcal{O} 完成者とも 音羽焼などは、 言われ これらの作品は後に ています。 作品は後に「古清水」
> 仁清風を学んで華や 赤褐 めませる

が

町 売りと乾山焼

ŋ どの京都の って画期をむかえることとなります。 がはじめられ、 それまで、 焼 物は、 大名や有名寺社等に買 尾形乾山(一六六三~一七四三)の、 万治年間(一六五八~六一)ごろ 1 取られてい 六一)ごろから た 出 現に 田焼 町 売 な

世上 条通寺 乾山 その清新なデザインを持つ食器類は、「乾山焼」として、 の好評を博しました。 は、 町西入丁子屋町)に窯を設けて焼物商売をはじめてお 正徳二(一七一二)年より二条丁字屋町(中 -京区二

なく、 しかし、 多くは公家や豪商などの間で売買されていました。 この乾山焼は、 まだまだ庶民の手が届 くものでは

焼物仲間の形成と焼物の大衆化

屋中」を結成して、 者が陶業に関わるようになり、陶工達は同業者団体である「焼 れによって五条坂 売りが主流となりつつあった明 栗田口 や清水坂・五条坂近辺の 本格的な量産体制を整備していきます。 のように新しく勃興してきた焼物は、 町内では、 和年間 七六四 ほとんどの 5 七

古清水 六角段重(京都府立総合資料 館蔵・京都文化博物館管理)

開花します

高そ した。 級陶器を生産して \mathcal{O} 大 衆性によ いって力を **,** \ た栗田焼にとっ を 伸 ば Ļ 京 都 ては大きな脅威となiの焼物の中でも老舗 ŋ で

そ

W

坂

を低 て な

格

で産

な 価 田

ったた

粟 中

焼 五

に 条

似



め、文 するように た に 巡 ŧ お 0) 1

を

成

条坂との ~って、 こりまし 焼物 政 (七(一 間 粟 \mathcal{O} で 田 独 八二四 争 焼 占 と 五 権 論

が

の手腕をみせた欽古堂亀祐(一七六五ヶ原川の門人には青木木米を筆頭にを成し遂げた先駆者が奥田頴川(一七展開します。そんな中、京都におい 四~三〇)には、 ŧ 割お nれない しか この後、 清風 て、 . 戸 初 磁器の生産が盛んに行われ、期には、肥前有田(佐賀県西の開発 力なパトロ ŧ \mathcal{O} ŧ 焼 のだと評判を受けて以降、 京都の 末 のから有田 \mathcal{O} 京都 動乱 焼 ンであっ 要は 物界は最盛期を迎えることになります。 でも磁器の需要が一 や明治二(一八六九)年 磁器の影響を受けた新しい意匠 挙に低下することになります。 (一七六五~一八三七)ら俊秀が多 た公家・大名家・ ·頭に仁阿弥道八、青磁に独白((一七五三~一八一一)です。 おいて最初に完全な磁器製造 それが多少のことでは 松浦 文化・文政期(一八〇 郡 段と増加 有田地方) 0) 東京遷 豪商 などを失 かどに を都によ 作風 独自 ^ ک

治 期 京 の

衛(一八二四~この製作が行われ 工 ハきく とむかいます。 一場機能はほとんど停止してし 幕■ 末 明 評価され が 行わ 明 治の 'n \mathcal{O} 変革 ました。 (四)によって制作された 明 -期にお 治三(一八 しか 1 į て、 七〇)年には ま 昭 粟 1 和初期 田 その後、 焼 「京産」 \mathcal{O} は 不 況に 摩書出出 栗田 錦門 よが光気の 焼 いって、 海 は 山獅 衰 外 宗磁 退 Ċ 兵~器

芸家を輩出 統的な高級品 を強めながら生産を継 、功を見ることが出 清水五条 しました。 題向、 坂でも輸 技術的な卓越さ、 来ませんでした。 続 出 六代目清水六兵衛など多く。卓越さ、個人的・作家的な: 用 製品 を生産 しか ï L ます その が 後 仏は、 な性 \mathcal{O} れ 恊 格 伝 ₹>

三月に 陶芸の地として世界的にどへと生産の地を広げ、 定を受けるに至っています。 の地として世界的に知られと生産の地を広げ、走泥社一次大戦後には清水焼団地 「京焼 清水焼」 とし られるようになりが社が新しい陶芸四地(山科区川田 て通産省より伝 り、 田 芸運 清 統的 水 昭 動 焼 工芸品 和五 を 寸 行うな 地 十二 町 0 年 な

歩く/見る

粟田焼発祥地 東山区粟田 [鍛冶町 (粟田神社

ため 田 粟 粟田焼と呼ばれるようになりまし \Box 田 焼という名称 焼は洛東粟田 でしたが、 地 域で生産された陶器 窯場 が た。 栗田 の総称で 帯に拡 大さ 元来 れ は

粟

左京 区 屋杪永 生九右衛門が、 ・ が元(一六二四) 尚 崎 天王町 が、 および粟田 東 Ш 三条蹴上今道 区 東 П 山 付 五. 4条付近 近で産出する岡崎 町に で産 住 出 ts. する遊ぎの 土を 行調 用 士立工 B

初 期以 します 降、 付 陶 に器を生 蓮れん 院產 (東山区 したことが 栗田 粟 口三条坊 田 П 焼 \mathcal{O} 町 は \mathcal{O} ľ 保 ま ŋ 護 Ć, \mathcal{O} Ł

焼色絵 明治三(一八七〇) の作風を取り入れた 年に は、 「京薩摩」 近 代 \mathcal{O} 栗田 の彩 I焼を代 画 [法が開 発 \overline{z} れ、 薩 塺

栗田 焼 發祥之地 年代振 田

かえま、 楠針 と部で伊いな 焼 は す輸出 彌や東きり 衰 式調 退 す \mathcal{O} 山部 0 ること 死 和四十五 黄 のちに貿易不 金時 去 昭 和五 に ょ 代 十年九三 . を 向 なり り 粟

水焼 発祥 地

東山区五条通東大路西入北側 (若宮八 幡宮

が称 発 起 清別別寺 展しましたが、 源 であ 玉 廟 焼 るといわれてい (東山 説には宝徳期(一 は .煙がかかるため、 東 山 区 \mathcal{O} 清閑寺山 清水坂・ 慶長(一五九六~一六一五)末に阿弥陀ケ峰 、ます。 四四四 ノ内 五条坂近辺 命により清水寺近 【九~五二)に音羽屋九郎、余坂近辺で焼かれた陶磁 一町)の近くに開窯した音羽焼が 音羽焼は 清閑寺の庇護を受け 辺 へと窯を移 右ラ器 電えの 門捻総



生産したのに対 類 粟田: 文政年間(一 \mathcal{O} 焼が 高級 を 主とし 陶器を して、 八~三 て発展 日 中 I 常雑 宁

> 0 で • 高 産する陶磁器の代表的な名称となりました。 が以 同橋道八家などが送以降、磁器の生産 産 ~挙げら Ł 始 į, 8 ま 粟田 焼が衰退 陶家とし し て清き 7 水ず 六く 兵~

野の ガ々村仁清か 右京区 |御室竪

や瀬 伝えら 和好みの 戸 々 、村仁清は で陶芸を修行した後、 れている陶芸家で、 斬新で洒落た作風 丹波国 北桑田 、 茶匠金森宗和の指導 名は清右衛門といい、: の茶器を作りました。 郡 野 々 村 (京都府 美山 を受け、 京 0 粟 出 田 П

れました。 を発揮し、 室焼」 (仁和寺焼)を作成、 正保年間(一六四四~四八)、御室仁和寺門前に開窯し 後水尾上皇をはじめ多くの 轆轤成形と色絵付に卓越した才 公家や大名などに 7 好 ま 能 御

この石標は仁 丁目)には作陶を記念した石碑が建てられて 清 \mathcal{O} 窯跡を示すも \mathcal{O} で、 清 水寺 1 ます。 · (東 山 区 清 水

尾站 化形乾山 陶 窯跡 寺

して生まれ 尾 形 乾山は、 ました。 京都 兄は 0 吳服商 呉服商雁金屋三代目尾形右京区鳴滝泉谷町(法蔵 有名な尾 形光琳(一 うりん 目尾形宗? 六五八~一 謙 \mathcal{O} 次男と 七

意 7 二(一六九九)年、 を受け、元禄二(一六八九)年、 称しました。その後、 (一五五八~一六三七)の孫 います。 京 匠 閑を愛し \mathcal{O} 都の乾の方角にあ 色絵 作品には、 の傑作が数多く残っています。 隠逸を好んだ人物で、 鳴滝村(右京区鳴滝泉谷町)に開 兄光琳 近隣の野々村仁 たるため、 空中斎 \mathcal{O} 絵付による合作 御室に幽居を構えて習静 号を乾山 光崩より -清に陶技を学び り焼 としたと伝えら あ たる本 など、 物 \mathcal{O} 手 阿あ この ほどき 弥み 7. 光ラネっ 同 堂 れ 窯 +

この 7 お b, 石 碑 は 他 に 乾 清 Щ 水寺 \mathcal{O} 窯 にも 跡 を 石 示 すも 碑が建てら \mathcal{O} で、 宅 れ 7 跡 1 \mathcal{O} ます。 石 碑 غے 並 び 建

一奥 実 田だ 頴さい JI 4 宅 跡 東山 区大黒町通五条上る 東

に学び、 で家業を営みますが、 父 0 田 営む五条坂大国 潁 建仁寺内に開窯しました。 JII 七 五三~一八一一)は、本名を頴川 作陶を志して清水の 町 \mathcal{O} 質 商 して清水の陶工海老屋、丸屋の養子となり、三 庸 屋等三十二 11 兵で代

に

始 れ

須赤絵は、中国古赤絵や染付 見られ有名です。 O天明年間(一七八一 全盛期を築きまし 中国明代の赤絵 ・交趾などの 門下から 〜八九)に京焼最初 た。 名 色釉磁器を焼きまし の模倣の域を脱した独自 工を出 江 \mathcal{O} 戸 磁 器焼成 後 た。 期 \mathcal{O} 京 中 12 \mathcal{O} -でも呉 成 都 作 功、 風が 焼 物

学問を好み、幼時から儒学を高芙蓉に学び、覚を失ったため聾米とも称しました。 木屋」に生まれ、通称木屋佐兵衛(佐平)と 青木 :木木米(一七六七~一八三三)は、|**|青木木米宅跡 東山区大和大路|** 区大和大路通 祇園 匹 条上)と名 新 る 地縄手町 乗り 西 側 白 晚 0 Ш 年に 茶屋

感で朱笠亭の 学問を好み、 奥田 I 類川 入門 陶 説 Ļ を読 煎茶器を主体に独自 み、 刺激を受けて作陶を志 ますが \mathcal{O} 作風を確立、 <u>二</u> 十 į 九



となり、仁院宮栗田口 た。 文人陶工として名を 文化二 七 九 仁阿弥道八・永楽得世の御所の御用焼物 五. 5 八〇 五. 五 几 成 ととも L 保物 ま 全師

幕末の

京都焼物界の三

名

 \mathcal{O}

小彩

 \mathcal{O}

田たと 能のい 村なわ 竹ネれ 田でま らとも L た。 親交がありました。 色 絵 • 青 磁 などに 佳 品 を 残 頼ら 山が

陽う

B

宅跡 東山区五条通東大路西 入

あたります。 いめます。 まし 初 代仁にんある たが、 同橋は**が** 横送**道**八・ みどうはち 以後代々高 宝暦年間(一 (?~一八〇四)は、 橋 道 七五 八を名 一~六四)に粟田に出 乗 で り、 伊 勢亀 現在 Щ 藩 の当主 士の 一は八 家に 7 作 代 陶 生 Ħ を

より になります。 七八三~一八五五)が有名で、 歴代の 八二六)年に仁和寺宮から「仁」の字を、 文化八(一 阿弥 中でも 号を下 八 一 二 初 代道 賜され、 年、 八の 粟田 次男であ それ以後、 口から五条坂に移 奥田頴川に陶技を学 る仁 仁阿 阿 弥 一弥と称 醍醐三宝 道 八二 転、 す んだ彼 院 文政 るよう 代 門 目 跡 九



Ļ しまうこし や尾 などを制 基調とし します 家 次業では た。 形乾 が 陶芸家として有名です 作、 た 山 自ら 染 6 琳 冏 ことに 付 \mathcal{O} 派 弥 作風 風 は 磁 道 \mathcal{O} 茶 八 本阿 を得 色 \mathcal{O} で 0) 絵 湯 名 弟 弟 彦 尾*と 弥 趣 声 を 光 唐 味 形がし 悦 物 な 博

五条坂 器まつ 東山 区五条坂付

陶器業者が 売 な 東 八 店そし 月 1 大 の七 ベ 路から五 ントが て作 日から十日まで行われるこのまつりで 店を連 条橋 陶 繰り広げられ 家ととも 東詰 ね 京都 の間 ます。 12 \mathcal{O} 夏 約 瀬 五 \mathcal{O} 戸 や地信が元 風 百軒の露 物詩 日楽、多治見なれ清水の窯元、 になって 店がなら は、 など全国 、ます。 問 び、 五. 屋、 多 通